
幻想の白い花～或る貴婦人の肖像～

百日紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の白い花～或る貴婦人の肖像～

【Zコード】

N1516BA

【作者名】

百日紅

【あらすじ】

「このまま、本当にいいのか？」

美貌も才能も野心もあるが、下級貴族というだけですべての可性を閉じられた娘・マリー・テレーゼに名門侯爵家の麗しき次期当主はある計画を持ちかける。

それは、彼の義妹となり侯爵令嬢として、かの家の政敵である男に嫁ぐというものだった。

一方、すべてを承知し権力への思惑を秘めながら王族に連なる誇り高き公爵はマリー・テレーゼを正妃として受け入れる。

夫と義兄。熾烈な権力闘争の渦中に飛び込んだマリーテレーゼが選
んだ道は・・・。

現在に至る、少しだけ前

数年振りに再会した親友は、別れた時とほとんど変わっていなかつた。

同性のオレの目から見ても非の打ちどころの無い完璧な容姿に、そこに在るだけで他を圧倒する清冽なオーラ。

あまりに変わりないその姿に、オレは一瞬、この祖国を離れていた数年間などなかつたような錯覚に陥る。

しかし、オレがリーフェンシュタールを離れていた間、オレに告げる事など何も無かつたとでも言いたげに取り澄ました表情を見た瞬間、オレを襲つたのは懐かしさではなく目の前の、親友だった男に対する猛烈な怒りだつた。

振り上げた拳を、ソイツは避けるそぶりすら見せなかつた。

ガツ・・・！

殴つた拳がジンジンと痛む。

だが、オレは僅かに血の滲んだ拳を握り締めたまま立ち尽くした。

・・・・・もう一度、ソイツの胸ぐらを掴んで引きずり上げ、そのお綺麗なツラに思い切り拳を叩き付けたいという衝動を必死に抑えながら。

力任せに殴られた勢いで、バランスを崩し緋色の絨毯の上に膝をつ

いたソイツを見下ろし、オレは言った。

「何でだ…・・・・・・・？」

切れた脣から零れ落ちる血を、手に手の甲でもつべつと拭い、ソイツは無言で立ち上がる。

その極上のサファイアのような青い瞳に何の感情も浮かんでいないのを認めて、オレはそれまで怒りで血が上りきっていた頭が、すっと冷えてゆくのを感じた。

「お前のことを、信じていたよ。・・・・・お前なら、絶対にアイツを幸せにしてやれると思ったから、オレはこの国を・・・・アイツの傍から離れたんだ。オレじゃあ・・・・・アイツを幸せにできないからな。」

オレは自嘲する。

そ
う。

グラーツ上級学院時代に出会ったアイツにオレは恋していた。
アイツが幼い頃に引き離された腹違いの「妹」だと知った時はもう既に手遅れ。

妹だと知つていっても一人の「男」としてしかアイツを見られないくらい、オレはどうふりアイツへの恋情にハマッていた。

アイツがオレを選んでくれたのなら、神に叛く禁忌を犯すことになつたとしても、絶対にアイツの手を離したりはしなかつただろう。けれど。

アイツは禁忌云々以前に、大人の事情が何であれ、幼い頃無情に手を離した挙句記憶から綺麗に自分を消し去つたオレを、けして許そうとはしなかつた。

「…………ライン。」

昔の学友といふ立場では、もう並び立てないほど、この國の中核を担う重要人物となつたかつての親友が、透明な視線をオレに向ける。

いきなり執務室に飛び込み、突然喚き出して部屋の主を殴つたかと思えば、その後急に黙り込んでしまつたオレ。

端から見れば、とても正氣とは思えない行動を取つたオレをどう扱つたものかと思案しているような神妙な顔つきで、親友だった男が慎重に声をかけてきた。

そこで、オレは自分の滑稽な口づけを仄めいていた。

アイツは、頭の良い女だった。

そして、誰よりも誇り高く、それ故に孤独だった。

底知れない孤独を埋めるよつて、あらゆるものに真摯に対峙し努力したアイツは、兄のオレが言つのもなんだけど、最高にイイ女だったんだ。

そんな女が、いくら窮地に瀕しているからといって一度は手酷く拒絕した異母兄に縋つたりするだろうか？

リーフェンシュタールの政変事情を聞き及び、妹の身を案じていた矢先に届いた彼女からの「手紙」。

その衝撃的な内容に思考を停止させたまま、気がつくとオレは祖國行きの船に乗っていた。

そして王都・ツェルナーに着いたその足で、アイツを任せた男の屋敷へ駆け込み、現在に至るつてわけだ。

でもな。

落ち着いてよく考えてみろ。

確かにアイツは、オレに手紙を書いた。

そして、その手紙を読めば、オレが何が何でもここに戻つてくることを予想しただろう。

それくらいの計算は容易くできる、頭の切れる女だった。

だが、それは自分自身の為か？

アイツを結果的に最悪な場所へ追い詰めた男を自分に代わってオレ

に詰り殴らせる為にやつたことか？

答えは否、だ。

アイツは、自分が助かるために誰かの慈悲に縋るような無様な真似をするくらいなら潔く最悪の結末を選ぶだろ？

そして、どんな結果にせよ自分で選んだ道であるなら、泣き声一つ零さず黙つて散るだろ？

思い出した。

アイツはそういう女だ。

オレは、口元に血を滲ませて立ち尽くしている田の前の男に、胸ポケットに入っていた手紙を差し出した。

何度も読み返し、焦燥のあまり握り締められた手紙は、元は高貴な貴婦人のものらしい綺麗な透かし模様の入った薫り高い纖細なものだったが、今ではどうにその面影を失つていた。

丁寧に折りたたまれた手紙を無言で受け取り、カサリと開いた男はその筆跡に気づき微かに瞠目する。

「アイツからの、手紙。・・・・確かにアイツは、いろいろ問題のある女だつたけど。・・・・そこに書いてあることがアイツの眞実なんだと、オレは信じてる。」

オレの意図が解らない、とでも言いたげに視線だけを「ひかり」に向かた男に、オレは噛んで含める様に言い聞かせた。

「アイツは、お前に『愛してない』って言つただろ？同じよつじきつとあのヤローにも最後には言つたはずだ。『愛してない』って。でもさ、それはアイツなりの誠意であり愛の告白だったんだよ。素直に自分の心を表現するには、アイツはあまりにも孤独に慣れすぎたんだ。」

話しながらも、よつやくまともに回転し始めたオレの頭脳が、アイツの意図を明確に浮き彫りにしてゆく。

これは確信。

アイツは、アイツなりに導き出した自分の「存在意義」を守るために、オレをリーフォンショタールに呼んだ。

だからオレは、アイツの兄としてアイツを愛する一人の男として、アイツの最後の希望を叶えなくちゃいけない。

それが、アイツの本音を 恨み言わえも 最後まで聞こうともせず、とつとと尻尾巻いて逃げ出した馬鹿なオレのアイツへ出来る唯一の償いだから。

執務室の大きな格子窓から差し込む光に輝く金糸のような淡いブロンドをわずかに乱れさせたまま、ソイツはじつと手紙を読んでいた。

白い紙に綴られた黒い文字を追う瞳、微かに震えるしなやかな指先から、隠しきれない動搖が透けて見える。

さつきまでの、等身大の人形のように静謐な佇まいが嘘のようだ。

馬鹿だな。

結局、お前もアイツ・・・・マリーテレーゼといつ女の真実を見抜けなかつた一人か。

後悔したつて遅い。

あんなイイ女にお目にかかることはそつそつないし、そんな女を手にするチャンスはもつと少ないんだぜ。

お前は、その両方の機会を目の前にしながらどうせ田先の利を追うこと夢中で、テレサの本心なんて気にも留めなかつたんだろう？

本当に、なんて馬鹿なんだ。

お前が、お前の姉さんを亡くしてからどんどん変わつていったことは解つていただけだ。

オレの大事な妹をこんな目に遭わせるくらい腐つていると知つてたら、どんなことをしてもアイツをこのどうしようもなく閉鎖的で

絶望的な国から連れ出したの。』

『イツばかり責められない。

オレだって、この手紙が来るまで何一つ解ってなかつたんだ。

いや、正直、判りたくも無かつた。

だつてそつだろ？

自分を拒絶した女と、その女が近づくことを許した男たちが彼女を腕に抱く姿なんて誰が見たいと思う？

結局、そんなオレの狭量と臆病さが祟つて、オレは大切なものを失つたんだ。

テレサのこと。

ユーリのこと。

カールのこと。

そして、どうしようもなく膾んでしまつたこの国のこと。

それ以上拒絶されるのが怖くて、すべてを切り捨てたオレは、「信じてる」という言葉を免罪符になにもかもを目の前の親友に押し付け自分一人だけこの世界から逃げ出した卑怯者だ。

手紙を手にしたまま動かない端整な男に、オレはここに来て初めてまともに向き合つた。

「…………すまねえ。」

素直に頭を下げたオレに、もの凄く意外そうな表情で顔を上げた男。オレは苦笑するしかなかつた。

数年ぶりに顔を合わせたかと思つたら、挨拶代わりに殴られたり詰られたりだもんな。その反応も無理ないか。

考えたら、コイツもいろんな意味で散々だよな、と思つと妙に笑了た。

まあ、大抵はコイツの自業自得だから同情はしないけどな。

「なあ。話してくれないか？お前の知つていること。・・・話せる」とだけでいい。・・・教えてくれよ、アイツのことを。」

そう。

オレは自分の犯した過ちを償つためにも知らなければならぬ。

この空白の数年間に何が起きたのか。

オレの愛する女がどんな風に生き、何を選択したのか。

話してくれよ、ユーリ。

オレの知つている中で最も美しく、最も気高い女。

オレの最愛の妹。

「アーニー、おはよう。

誰にでも、思い出したくもない恥まわしい思い出とこいつがある。

「家へお帰りなさい。・・・・・彼女は貴女に会いたくないそうです。」

石造りの薄暗い部屋で、一人待たされていた少女に告げられた言葉は無情なものだった。

少女・・・・・金色の髪に深い湖のような青緑の瞳をもつ、まだ幼いがそれでも見る者を魅了する完璧な造形をした少女は、白と黒の尼僧服に身を包んだ壯年の女性をじっと見上げた。

物言わぬ少女の大きな瞳に何を見たのか。

尼僧は、それまでの取り付く島もないような態度を少しだけ和らげ少女の小さな手をとった。

「貴女のお母様は、世俗から離れ神に仕える身。どんなことがあっても、けして貴女に会うことはないでしょう。・・・・・貴女には、きちんと御両親がいらっしゃるはず。その方達を本当の御両親と思い、もうけしてここへ来てはなりませんよ。」

実母を慕い、遠くからこの辺鄙な修道院へたつた一人で訪ねてきた幼い少女にとって、それは随分厳しい言葉だった。

しかし、同時にそれは少女を不憫に思つての、尼僧なりの精一杯の優しさでもあつた。

下手な期待を持たせ続けることの残酷さを、彼女はよく知っていたから。

修道院の出口の扉の前まで導かれた時、それまで俯きひたすら沈黙していた少女が、ようやく声を発した。

「お母様は、わたしのことを…………何か仰っていましたか？」

その声はあまりにもか細く頼りなげで、そこが人通りの多い往来であれば到底聞き取れぬほどの小さな響きであつたが、幸か不幸か少女が立つ場所は人気のない整然とした修道院であつたから。少女の問いは、尼僧の耳にはつきりと届いた。

尼僧は、少女に氣取られぬよう、そつと溜息をつく。

目の前の少女にどこか似た面差しの若い尼僧は、顔色一つ変えず彼女に言った。

あの娘は生まれてはならなかつた罪の子。その生を誰にも祝福されることのなかつた、呪われた存在。・・・・・そんな子供に、どうして今更会いたいと思うでしょう？

少女の母親は面会どころか、少女を自分の「子供」と認めることがすら拒んだ。

だが、尼僧はその事実をそのまま少女に伝えることが出来ず答えた。

拒絶される恐怖に震えながら、それでもいまだ母親の自分への愛情を諦めきれずに仄かな希望を、白虹のアレキサンダライトのような美しい瞳に宿している少女に。どうして告げることができよう。

実母の、あの残酷すぎる言葉を。

だが、年齢よりもずっと聰い少女は傍らを歩く尼僧の重々しい沈黙からすべてを悟つてしまつたらしい。

人形のように愛らしい顔を白く強張らせたまま、少女がそれ以上何かを問うことは一度となかった。

「貴女に、神のご加護を。」

別れ際、尼僧は少女の祝福を心から祈った。

貴族の娘らしい愛らしいフリルが幾重にも縫い込まれた水色のワンピースは、けして安物ではない。

・・・・・大切にされている。それが容易に判るくらいには、少女の身なりはきちんと整っていた。

このまま、実母のことなど忘れて優しい養父母のもとで幸せになれ

「ことを尼僧は祈つた。

重い扉が閉ざされる。

おそらく、この扉が少女のために開かれることは一度とないのだろう。

そして、少女がこの場所を訪れることがして……。

「神様なんて、いないわ。いたとしても、『神はすべての人を等しく愛している』なんて絶対嘘よ！」

少女を拒むように完全に閉ざされた扉の前で、少女はポツリと言つた。

自分は一体、何を期待してここへ来たのだろう。

感動の再会を期待していたわけではない。自分を手離したことを謝罪して欲しかったわけでもない。

ただ・・・・・。

ただ一言。

「貴女のことを、忘れたことはなかった。」

そう言って、ほしかった。

一度でよいから、抱き締めて欲しかった。

それだけだった。

それは、欲張り過ぎる要求だったのだろうか？

実母にとつて自分は、この世に産み落としたことを後悔するだけの、会う価値もない存在だったのだろうか？

ワンピースの裾を握り締め、少女は泣くまいと歯を食い縛った。

それでも、喉の奥から涙とともに嗚咽が込み上げる。

養父母に引き取られる前。

いつも一緒に居て少女と遊んでくれた兄もまた、あっさりと彼女の前から消えた。

「泣くなよ。きつとすぐにまた会えるから。」

離れるのを嫌がり兄の服を握つて泣く少女に困ったように笑いかけ、羽根よりも軽いそんな言葉を残して。

だが少女はその言葉に縋つた。

いつか兄が迎えに来てくれるのだと信じてずっと待ち続けた。

やがて気づく。

あの時の兄の言葉が、少女を自分から引き離すための方便にすぎなかつたことに。

養父母に不満があるわけではなかつた。

むしろ、彼らは少女を実の娘のように大切に愛してくれている。

だからこそ、不安だつた。

直接的な血の繋がりのない養父母にそんなにも大切にされる価値が自分にあるのだろうか、と。

実の父に捨てられ、兄からも見放された。

血の繋がつた肉親に愛されない自分には何か欠陥あるのではないか。そのことで、いつか養父母の愛さえも失つてしまふのではないかと、少女は常に怯えていた。

だから、実の母親を捜した。

そして、会いたかつた。

会つて、確かめたかつた。

自分が、けして「必要のない」人間ではないことを。

だが、現実は少女の最後の希望を粉々に打ち碎いた。

「…………わたしは、『いらない』人間なのね…………
。。」

輝くアレキサンダライトの瞳から零れる透明なしづくが、少女の足元に咲く雪割草の小さな白い花の上に落ちて弾けた。

まだ風の冷たい早春の出来事だった。

それは少女・・・・・「マリー・テレーズ」を凍らすのに十分すぎる、思い出すのも恥まわしい辛すぎる記憶。

* * *

「準備は出来たかい？」

ノックとともに、淑女が控える黄金で装飾された白い扉を開けた「理想の貴公子」まさにそう形容するに相応しい美貌と気品を備えた青年　は、バロック調の装飾が施された大きな鏡の前に立つ少女を見て、満足そうに微笑んだ。

「素晴らしい。『女神のよくな』という形容はまさに、今日の君のためにあるようなものだ。完璧だよ、テレサ。君の美しさと教養、気品を前にして、我がシユタイアーマルク家にふさわしくないなどと言える者などいるまい。」

結い上げたハニー・ブロンドの髪にはダイアモントをあしらつた華奢な髪飾り。そのしなやかな肢体には、わざわざ花の都・ハースから取り寄せたという白を基調にした品のよいドレスを纏い。

下品にならぬ程度にあいた胸元と白い耳朶、華奢な手首を飾るのは、御揃いであつらえられたオパールと金細工のネックレス、イヤリング、腕輪だった。

そして、薄く化粧をのせた若々しい美貌は彼女を飾るどの宝石よりも玲瓏とした光を放つていて。

ヨリウスが彼女をして「女神」を表するのはけして大げさなことではないだろう。

実際、豪奢な部屋で贅沢な家具を映す大きな鏡の前に立つたマリーテレーゼは、知性と美貌、品位を兼ね備えた非の打ちどころのない貴婦人だった。

そして、黒いタキシードに身を固め白絹のタイを見事なサファイアのピンで留めたヨリウスもまた王国で五指に入る名門侯爵家の嫡子の名に恥じぬ「完璧」な貴公子だった。

そんな貴公子が、突然少女の前に立つと優雅に膝を折り少女の白魚のような手を恭しく取る。

「ゴーリ様？」

青緑の瞳が訝しげに見下ろしているのも構わず、ゴリウスは自身の白手袋に包まれた手の上に重ねられた少女の纖細な手にそっと唇を寄せた。

シャンテリアの光が青年の袖口を飾るルビーのカフスに反射し、驚きに瞠目する少女の瞳を射る。

「…………何のつもりですか？」

警戒するようなマリー・テレーゼの声音に、ゴリウスは苦笑しながら立ち上がった。

「別に。深い意味は無い。ただ、美しい貴婦人に対する最高の礼をとつただけなのだが。…………どうやらお気に召さなかつたようだ。私は、君に敬意を持つて挨拶することもできないのか？」

どこか揶揄するようなゴリウスの声に、マリー・テレーゼは疲労を隠さずには答えない。

「そういう意味でないことは、お解かりのはず。…………すみません。これからのことを考えると、緊張してしまつて。…………少し、気が立つているのです。」

青白い顔の少女を見遣つて、ゴリウスは僅かに溜息をついた。

「緊張するな……と言つても、無理もないか。今宵は君の人生が大きく転換する日だ。」

「…………ええ。」

「だが、心配しなくていい。君のことは、必ず私が守る。そうでなくては、ラインに申し訳が立たない。」

「…………。」

黙り込むマリー・テレーゼの心の内をどう捉えたのか、ユリウスは部屋から見下ろすことのできる、シュタイアーマルク邸の優雅なシンメトリックのスロープを支えるゴシック様式の列柱とその奥にある正面玄関へ視線を向けた。

夜だというのに、昼のように明るい大広間。鳴り響く管弦楽。

開かれた正面玄関の扉から漏れ出す光の中へ次々と吸い込まれてゆく、着飾った男女達。そのどれもが、この国を代表する貴族・実業家・高級官吏ばかりであることをユリウスは十分承知していた。

「見たまえ。我がシュタイアーマルク家の『新しい娘』を歓迎するために、こんなにも著名な人々が集まつてきている。君の、新たな人生の門出としては最高の夜ではないか?」

「見て、値踏みする為でしょ。『歓迎』する為に来た人など、きっと一人もいないわ。」

どこか遠い目をして、ユリウスの隣に並び窓の外を眺めるマリー・テレーゼ。

そんな彼女を逃がすまいとでもするように、少女の細い両肩に手をのせコリウスは静かに宣告した。

「だからといって、それが何だ？君は誰よりも美しい。どんな女も君の前では霞んでしまうだろう。君に足りないものは、『身分』それだけだった。だがそれも今宵、解決する。」

「貴方の義妹になることによつて、ね。」

どこか刺々しい少女の言葉を無視してコリウスは続けた。

「君は、私の妹になることによつてこのリーフォンシュタール社交界一の華になる。」

「・・・貴方が用意してくださる最高の『夫』にふさわしい、ね。」

答える代わりに、コリウスは鮮やかに微笑んだ。

夜の窓に映る、「世の中の醜いもの」など一切知らぬような穢れのない美しい微笑み。

その「理想」の王子様のような容姿と綺麗なものしか映していないようなサファイアの瞳をもつ青年の中に、実は人の悪意や嘲笑を見慣れたはずのマリー・テレーゼでさえ戦慄するような狂氣と酷薄さが隠されているということを知ったのはいつの頃だったか。

マリーテレーゼは、ユリウスがこの危険な計画を自分に持ちかけてきた時の言葉をよく憶えていた。

選ばれし名門氏族の子女だけが入学を許されるリーフェンシュタール最高峰の教育機関・グラーツ上級学院。

優秀な生徒の中でも群を抜いて優秀な生徒だけが集められた、学園自治を担う役割も持つ特別練の執務室。

とても学生に充てられたとは思えない豪華で広い部屋で偶然一人きりになつた侯爵家の嫡子であるヨリウス・フォン・シュタイアーマルクと彼を補佐する男爵令嬢、マリー・テレーゼ・フォン・ヒルデブラント。

淡々と作業する手がふと止まつた昼下がりの静寂の中で、すべてが始まった。

「君は、このままで良いのか？」

手にした書類にサインしながら、世間話でもするよう口調で突然切り出してきたヨリウスの意図が判らず、じつと青年を眺めていると、いつまでも答えない少女に業を煮やしたように彼はもう一度口を開いた。

「君は、このまま普通の貴族の娘・・・・男爵家の娘が送るような人生で満足できるのか、と聞いているのだが。」

普通の男爵家の娘が送るような人生 遠まわしだあるが、それは爵位目当ての金を持った平民と結婚するか、同じくらいの家格の息子と結婚するか。つまり、大した身分もない男の妻として平凡

に一生を終える、ところ」とを意味していた。

コリウスの言葉の意味を正確に理解し、マリー・テレーゼは溜息をついた。

「他に、わたしに選択肢があるとでも？」

身分差の隔たりが昔ほどなくなつたとはいいとも、このローフォン・シユタールではいまだに特權階級意識が強く、既得権益もすべて特權階級の人間が握っているのが現状。

しかも、この国は大陸の国々に比べると女性の地位は圧倒的に低い。そんな中で、しがない男爵家出身・・・しかも養女であるマリー・テレーゼが「上」へ上のチャンスなどあるはずがない。

彼女を取り巻く事情を充分理解しているはずのコリウスの口からそんな問い合わせが発せられること自体随分失礼なことだと、些少か傷つきながらもマリー・テレーゼは氣丈に田の前の青年の端整な顔を睨みつけた。

「誤解しないでくれ。私は、君を懲めるつもりでこんなことを言つたわけではない。」

書きかけの書類の上にペンを置き、額の下で手を組むとコリウスはじっとマリー・テレーゼを見据えた。

「それでは、どうこう理由が、お聞きしても？」

「勿論だ。・・・・」の際だから、はつきり言おう。私には君が必要だ。」

「…………え？」

一瞬、高鳴った少女の心は、しかし次の瞬間無残に切り裂かれた。

「君の知性と美貌は武器になる。私には理想を実現させなければならぬ義務がある。そのためにはテレサ。君の力が必要だ。」

ユリウスが口を開く度に心が冷えてゆくのが分るので、マリー・テレーズにはどうするにもできない。

「わたしに何が出来ると？　コーリ様の理想は御立派だと思いますが、その実現のためにわたしがお役に立つことがあるとは思えません。」

震える指先を気取られないよう、書類をトントンと机の上で揃えることで必死に誤魔化しながらユリウスの申し出をかわすマリー・テレーズ。

思いがけず期待してしまった反動だらけ。氣を抜くと泣きそうになる自分がみじめで恥ずかしくて。できることならその場を飛び出してしまいたいという衝動を理性を総動員して抑えながら。

「あるのだよ。そしてそれは、君にひとつでもかけて悪い条件ではないはずだ。」

少女の心を踏みにじっているとは露とも知らず、ユリウスは淡々と言葉を紡ぐ。

「女性がこのリーフエンシュタールで成り得る、最高の地位を君に。勿論、王妃は無理だが『権力』という意味では単なる飾りの王妃などよりずっと『力』を有効に行使できる場所。君の能力を最も活かせる地位だ。」

ユリウスの声が遠い。

マリー・テレーゼは温度を失つてゆく心とは裏腹に、冷静に自分を分析していた。

わたしは自分で思つていたよりも、ずっとこの人のことが好きだったのだわ。

それをこんな形で自覚させられるなんて、なんて皮肉なのだろう。

マリー・テレーゼは泣き笑いのよつた微笑を浮かべて人形のように透明な玻璃の輝きを放つユリウスの碧い瞳に問つた。

「それで協力すると言えば、その場所までヨーリ様がわたしを導いてくださるとでも？」

「ああ。当然だ。そうなれば、君は私にとつて最も大切な人となるだろう。」

「大切？ ライン様よりも？」

悲鳴を上げる心を巧妙に隠し、あくまで軽い口調でマリー・テレーゼは会話を続けた。

だが、ユリウスの表情は真摯だった。

「そ、うだ。……ラインはこんな私を許すまい。だが、君ならば解るはずだ。失うことを見ついている……神を疑い、憎んでいる君ならば。」

「…………。」

重い沈黙が、二人を支配する。

「…………その、わたしにふさわしい場所とは？」

先に口火を切ったのは少女の方だった。

それは、マリー・テレー・ゼがヨリウスの企てに加担するということを意味しているということを両者は暗黙のうちに了解した。

「…………あの男の隣だ。」

残酷ささえも美の一端となる端麗な顔が向いた視線の先を追うと、執務室の窓から見える中庭には、親衛隊に囲まれた紫紺のいと高貴なる人がいた。

ヨリウスと常に学園の首席を争う優秀な学園自治執行部の一員であ

り、王位継承権を持つ名門エスター・ライヒ公爵家の嫡男。

カールハインツ・ディートハルト・フォン・エスター・ライヒ。

王族に連なる血の証明であるアメジストの瞳と夜空のような深い藍色の髪を持つ見目麗しい青年。

「・・・カール様？」

予想だにしなかった突飛すぎる発言に、啞然としながら眼下の中庭を横切ろうとするディートハルトを眺めるマリー・テレーゼに、ユリウスは静かに自らの奸計を語り出した。

「そう。君には、カールの妻になつてもらいたい。勿論、愛人ではなくあくまで正妃だ。そのためには、君には我がシュタイアーマルク家の養女になつてもらひ。」

マリー・テレーゼはユリウスの意図をおぼろげながら理解した。

彼は知つているのだ。

自分の「理想」を実現するための最大の邪魔者としていざれ必ず彼の前に立ち塞がるのが、ディートハルトすることを。

だから、いざという時の切り札としてディートハルトの側近くに自分の息のかかつた者を置いておきたい。手を組むか叩き潰すかは状況に応じて如何様にも。

そのためには、使いようによつては、盾にも矛にもなる切り札が必要だった。決定的に彼より優位に立つための札が。

しかし、ディートハルトもまた、ユリウスと双璧をなす切れ者である。身分も才能もこれから手にするであろう権力も拮抗している。

血筋、という点においてはユリウスを遥かに上回る彼は、おいそれ

と隙など作るまい。

そこで、マリー・テレーゼの存在が必要になつてくるのだろう。

しかし・・・。

「シュタイアーマルク家の皆様が、私を養女にすることを承知なさいますでしょうか？それに・・・・確かに、シュタイアーマルク家であれば婚家としてエスター・ライヒ家にとっても不足のない相手だと思いますが、運よく縁組が結べたとしても・・・・カール様が私を側に近づけるとは思えません。」

少女の指摘したことは、すべて的を射たものだつた。

しかし、コリウスは動じない。おそらく、彼の中ではすべてが計算済みなのだろう。

その証拠に、頭脳明晰な名門学園の首席は、少女が提示した疑問によどみなく答えてみせた。

「君は、今は男爵家の娘だが、本当はラインの妹・・・・ヘルムホルツ子爵の娘だ。そして、正妻ではないが母親もまた、さる侯爵家の流れをくむ貴族の娘。ヘルムホルツ子爵は私の父とも仲が良い。それに、かの家は子爵家中でも歴史ある名家だ。血筋的にはんら問題はないだろう。・・・・何より・・・・君は私の亡くなつた姉に似ている。おやう、私の両親は君を一日で気に入るだろう。」

「次に、カールのことだが。エスター・ライヒ公爵家の婚姻は私と父で何とかしよう。君は、その月の女神のとき魅力で、カールの心の隙に入り込むのだ。・・・・・彼の妻として公妃として、信頼され愛される女性に。」

カールハインツ・ディートハルトに愛される女?

それは、この国を影で動かし同時に腐らせていくと云われている国王の寵姫になるよりも困難なことのようにマリー・テレーゼには思えた。

そもそも彼は、女に惑わされるような惰弱な人間ではない。最高の名家に生まれ、幼少より帝王学を叩き込まれたという生粋の貴族であるディートハルト。

19という若さにして、すでに王者の貫禄と近寄り難い高貴なオーラを放つかの青年の、確固たる信念を秘めた彫刻のように怜悧な美貌を思い浮かべ、マリー・テレーゼは思わず首を振った。

「わたしに、できるでしょうか?」

ディートハルトの去つた中庭を見つめるマリー・テレーゼに、ヨリウスは力強く頷いた。

「君ならできる。いや、君しかできないだろう。」

「ユーリ様。」

「なんだ？」

「やうすればわたしは、コーリ様にとつて『必要な』人間になりますの？」

その言葉に、ユリウスは困惑したように瞳を揺らした。

「何故そんなことを？君は、今もこれからも私にとつて、なくしてはならない人だというのに・・・。信じてくれ、テレサ。たとえどのような事があるうとも、私が君を見捨てることは絶対に有り得ない。」

「・・・そうですか。」

それは、ユリウスにとつては何の意味もない空虚な言葉だった。だが、マリー・テレーゼには人生を決する重大な言葉だった。

「わたし、やつてみます。コーリ様の『理想』のために。そして何より、わたし自身のために。」

その果てにあるのが、破滅だとしても・・・

* * * *

それから、マリー・テレーゼにとって怒涛の日々の連続だった。

ユリウスは何もかもをあらかじめ準備していたのだろう。

マリー・テレーゼの承諾を得たとたん、すぐに事は動き出した。

マリー・テレーゼは、自分を育ててくれた養父母の気持ちを慮って、シュタイアーマルク家に入るのはせめてグラーツ学院を卒業してからと望んだ。

しかし、先を急ぐユリウスはそれを許さなかった。

マリー・テレーゼが上流貴族の空気になじむためには、養子縁組を結ぶのは早ければ早いほうがいい。

それに、ディートハルトが同じ学園にいる間に事を進める方が何かとユリウスとつて都合が良いという打算もあった。

そんな思惑もあり、学園卒業日前にして少女はマリー・テレーゼ・フォン・シュタイアーマルクとなる。

書類上ではすでに、彼女はユリウスの「妹」となっていた。

そして、いよいよ今夜が、貴族の中でもむりに選ばれた上流階級の人間のみが集う上流社交界へマリー・テレーゼが踏み出す決戦の舞台であつた。

ここで、社交界に認められれば、彼女は名実ともにリーフォンシュタールの名門一族「シュタイアーマルク」の一員となる。

「さあ、行こうか。皆が待つていてる。」

優雅に差し出された手に、マリー・テレーゼは静かに口のそれを重ねた。

「覚悟はいいね？」

控え室を出、大広間へと少女をエスコートしながらコリウスが確認するように低く問うた。

その問いの裏には、「今なら逃げてもいい」という彼なりの最後の優しさが込められていた。

しかし少女は躊躇うことなくコクリと首を縦に振ることで血の退路を断つた。

「そうか。」

長い睫毛を一度伏せると、コリウスもまた覚悟を決めたように前を見据え、可憐さと危うい艶やかさを併せ持つ美しい「妹」を連れ長

い回廊を歩き出す。

犀は投げられた。

あとは時の流れに任せることはない。

数奇な生き立ちを持つ少女は、こうして天使の「」とき美貌の青年に導かれ運命の舞台へと足を踏み出したのである。

コリウスの「計画」通りにシュタイアーマルク家に入ったマリー・テレーゼに、ディートハルトとの婚約が正式に決まったという報告がもたらされたのは、彼女がグラーツ上級学院を卒業して一年を過ぎた頃。

新縁の鮮やかな6月上旬のことだった。

* * *

ユリウスの王立大学への進学に伴い、マリー・テレーゼもまた居を大學のある王都・ショルナーの侯爵家本邸に移した。

そこで彼女は貴婦人としての品位と優雅さに磨きをかけ、さりにコリウスのたつての要請により、どんな相手の会話にも卒なく対応できるだけの知識を身に付けるべく大学レベルの学問を特別に用意された家庭教師によつて学ぶことになる。

勿論、それらはすべてマリー・テレーゼをディートハルト好みの女に仕立てよつとするコリウスの目論見のためであつたが、女性の大学への進学が許されないリーフェンシュタールにあつてさうに高みの教育を享受できることは、この国の女性には将来の選択肢が少なすぎるところ々不満に思つていたマリー・テレーゼにとってこの教育方針はむしろ感謝すべき僥倖だった。

たが、これらの環境がすんなりと用意されたわけではない。

ヨリウスが予言したとおり、マリー・テレーゼを一日で氣に入つたヨリウスの母親・・・・・シユタイアーマルク侯爵夫人は、亡き娘に似た彼女を養女にできることを素直に喜んだ。

そして、正式にシユタイアーマルク家の一員となつたマリー・テレーゼを実の娘のように慈しんだ夫人は、学園を卒業した彼女にさらなる高等教育を受けさせることに反対した。

夫をたてる古風なタイプの貴婦人であるシユタイアーマルク侯爵夫人にとって、それらの学問は間もなくどこかの貴族に嫁ぎ妻となり母となる娘にとって必要のないものであり、同時に、可愛い娘と共に過ぎ去る時間を奪つだけの有害なものに過ぎなかつたのである。

「若い娘に、そんな堅苦しい学問など必要ありませんわ。そんなことを学ばずとも、テレサは十分に賢いではありませんか。」

そう言って、頑迷に反対する夫人を説得したのは、意外にも彼女の夫でありヨリウスの父親であるシユタイアーマルク侯爵だった。

息子に似た端整な面差しの侯爵は、妻に困ったように微笑みかけながら穏やかに言い聞かせた。

「世界情勢がめまぐるしく変わつてゐる今、女性にも先を見通す見識がこれから必要になつてくるだらう。テレサを良家に嫁がせたいと思うのなら、コーリの好きなよつことせることだ。」

物言いは柔らかだが、反論を許さない毅然とした夫の様子に、夫人はそれ以上何も言えず憮然として口を噤んだ。

こうして、シュタイアーマルク侯爵の口添えによつてマリー・テレーゼの教育の主導権はヨリウスが握ることに決定した。だが、息子の手前なんとか夫人を説き伏せたものの、シュタイアーマルク侯爵自身はヨリウスの方針に納得したわけではなかつた。

心優しき父親は、新しく娘となつたマリー・テレーゼを妻同様愛しく思つていた。

だからこそ、親が娘の幸せを願いその望みを叶えてやりたいと思つのは当然である。

彼が息子の方針に同意したのは、ひとえにマリー・テレーゼがそうなることを望んでいたからである。

勝氣で、向上心のある娘だ。できることなら彼女も大学へ行きたかつたに違ひない。

侯爵に容易にそう思わせるくらいには、マリー・テレーゼは十分に優秀で思慮深く博識だつたし、口には出さずとも、勉学への未練が残つてゐることは彼女の言動の端々から窺えたから。

あまりに早く逝つてしまつた実の娘・ロベルティーネにしてやれなかつたことを、マリー・テレーゼにはしてやりたい。

その一心からの配慮であった。

しかし、侯爵は息子のやり方に疑念を抱いていた。

マリー・テレー・ゼをシユタイアーマルク家の養女に、とコリウスから申し出があった時点で息子には何らかのよからぬ思惑があるのだろうと確信はしていた。

そしてもし、その思惑が誰かを傷つけるようなものであるのなら、けして許しては為らないと思っていた侯爵であったが、目の前に現れた娘を見て、その決心は早くも揺らいだ。

奇しくも、シユタイアーマルク侯爵夫妻の前に現れた少女は「き愛娘が短すぎる生涯を終えたのと同じ歳だった。

金髪碧眼の容姿もさることながら、コリウスに手を引かれ控え目に挨拶する可憐な仕草すらロベルティーネを彷彿とさせ、「シユタイアーマルク家の養女に」というコリウスの言葉を当初予定していたような即座の拒絶を示すことが出来なかつた。

結果として、亡き娘を取り戻すような錯覚に陥つた妻の強い後押しもあり、マリー・テレー・ゼという美しい少女を自分の養女とする書類にサインしてしまつた侯爵であつたが、純粹に喜ぶ妻の傍らで、時間が経つほどに深まる不吉な予感に苛まれ、本当にこれでよかつたのかと自問自答する日々が続っていた。

マリー・テレー・ゼは親の欲目を除いても素晴らしい娘だと思う。

学園を卒業し、ツェルナーで共に暮らすようになつてその想いは一層強まつた。

賢く、美しく、優しい娘。

ロベルティーネはない強さと孤独を内に秘めた娘。

コリウスはそんな娘を躊躇いなく己の政略の道具にしようとしている

る。

そして、「その時」は確実に近づいていた。

それが判るだけに、シユタイアーマルク侯は己の無力さが歯痒かつた。

だが、マリー・テレーゼをシユタイアーマルク家にとつて有益な婚家に嫁がせなければ、他の一族の者が黙つてはいるまい。

そもそも、一族の大半は「男爵風情の娘を・・・」と言つてマリー・テレーゼをシユタイアーマルク本家の籍に入れることに猛反対した。それを納得させたのは「彼女はきっと我が家に幸をもたらしてくれるはず」という抽象的でありながら明確に「裏」があるのだと暗に放つたユリウスの言葉だった。

その言葉が意味するところは、考えるまでもない。

彼女をシユタイアーマルクにとつて最も利害の一致する貴族へ嫁がせることで一族はより一層栄える、といふことだ。

貴族同士の婚姻が、時には政略のために利用されることはある話であり、むしろそれは常識であった。

しかし、少なくともユリウスはそんな貴族の常識を嫌っていたはずなのに。

息子のあまりの変わりように不安を覚えながらも、一度下した決定を覆すことはできず侯爵は養子縁組を申請する書類にサインをした。しかし、書類をユリウスに渡しながら釘を刺すことは忘れなかつた。

「ユリウス。」

「何でじょひ？父上。」

「私は、テレサを不幸にするような婚姻には絶対に賛成はしない。例えお前が、どんなに強引に話しが進めても、だ。」

現当主の意思すら無視してこの養子縁組を取り纏めたユリウスの強引さを皮肉りながら侯爵は言い切った。

しかし、父親のそんな反応を予測していたのかユリウスは動搖の欠片も見せない。

「無論です。可愛い妹をあえて不幸にする兄がどこにいるでしょう。私も、彼女には幸せになつてほしい。・・・だから、彼女には最高の相手を考えています。誰もが羨む、最高の相手を。」

「・・・・・・・・そうか。」

妙に自信に満ちたユリウスの母親譏りの美貌を眺め、侯爵は溜息をついた。

事態は、すでに自分の「うり知らぬ」ところで転がり始めているらしい。そして自分にそれを止める力がないことを、侯爵は自覚していた。彼に出来ることは、せいぜい息子が暴走するのを諫めることと新しい娘の幸せを祈ることだけである。

「お前の言つことが、眞実であることを願つてゐるよ。」

怜悧に輝く息子の青い瞳を正面から見据え、シュタイアーマルク侯爵は疲れたようにそう言つて会話を締めくくつた。

「そなたの家から、正式に婚約の申し入れがあつたぞ。 やつも思い切つたことをする。」

今まさに王都のみならず国中の貴族たちが注目している組合せの当事者であるといふのに、さも、他人事のように面白そうに話すディートハルトを、マリー・テレーゼはまじまじと見つめた。

ほぼ一年ぶりに逢ったディートハルトは、グラーツ学園を卒業した時とほとんど変わりがないように見えた。

いや、正確には王立大学に進級し権力により近い場所で過ごすことにより、以前から鋭かつた眼光が一層研ぎ澄まさるだらうか。しかしそれは、彼の生来の魅力を損なうものではなかつた。

むしろ、アメジストの瞳に宿るその光は、長い瑠璃色の髪と相俟つて彫りの深いディートハルトの美貌をより際立たせている。

そして彼が身に付けている洗練された紫紺のスーツが、そんな彼の気品と精悍さ近寄りがたい怜悧さを強調させていた。

「それにしても、回りくどいことをする。そなたが、あの時私の『駒』になつておればこのような回り道をせずに済んだものを。」

若干恨みがましく聽こえるのは氣のせいだろう、ヒマリー・テレーゼは澄ました表情を崩さなかつた。

かつて、一人がグラーツ学院に在籍していた頃、ディートハルトは

マリー・テレーゼの優秀さを気に入り自分の派閥へ誘ったことがある。勿論、それを意味するのが彼の「都合のよい駒」となることを承知していた彼女は考えるまでもなくその場で断つた。

その後、ディートハルトとの間が近くなることはけしてなかつたが、そのような経緯があれば当然の結果であつた。

そんな一人が何の因果かこいつして顔を突き合わせている。

晴れて婚約することが決まつた二人に再会の場として用意されたのは、王都にあるエスター・ライヒ家の邸宅だつた。

休暇中のディートハルトを軽い病で床に臥せつてゐる父親の代理としてマリー・テレーゼが機嫌伺に訪ねる、といつのが一応の口実ではあるが、その邂逅が実質、婚約しようとする二人の顔合わせであるところはすでに周知の事実だつた。

馬鹿馬鹿しいと思ひながらも、上級貴族ゆえに演じなくてはならぬ茶番。

マリー・テレーゼもディートハルトもそのことを十分すぐらひ理解した上での再会だつた。

「何故、このお話をお受けになつたのです?」

エスター・ライヒ家の邸宅は、本邸ではないものの、王族に最も近い名門貴族だけあってほとんど「富殿」と呼んでも差し支えないほど

の壮大さと絢爛豪華さを兼ね備えていた。

その広い庭園にマリー・テレーゼを誘い出したディートハルトは、散策する歩をあえて緩めながら、誰も聞いていないことを良いことに近い将来己の妻となる娘に鋭い言葉を放つ。

「ほう。ではそなたは、断られた方がよかつたのか？　そうなつたらなつたで、そなたはあの家に居られなくなるだらう。」

「そんなことを聞いているではありません。…………ゴーリ様が、何故この婚姻を持ち出したかカール様であればとづに御存知のはず。」

キルシュ地方の薔薇園を連想するほど色とりどりの薔薇が見事に咲き乱れる一角で足を止めたディートハルトは、少し後方を歩いていたマリー・テレーゼを振り返った。

春らしい淡いグリーンのワンピースを着、長い金糸の髪をゆるやかに背に流した彼女は、常に最上の美に囲まれ麗容なものを見慣れたディートハルトでさえ「美しい」と認めざるを得ない程瑞々しい麗しさに溢れていた。

そんな彼女を正面から捉えると、ディートハルトは少女の華奢な頬を長い指で軽く掴み顔を上げさせ、白いの視線と絡み合わせた。

春の穂やかな日差しが、マリー・テレーゼのアレキサンドライトの瞳を青緑色に輝かせているのを満足気に見下ろし、ディートハルトは答える。

「そんなことをそなたが知つてどうする？ 一つだけ言えるのは、やつの本心はどうであれ、この婚姻は両家にとつて利をもたらす、といつことだ。」

やがて実妹が王太子妃となる名門中の名門エスター・ライヒの次期当主と、宝剣を直に賜るほど国王の覚えもめでたい有力貴族の嫡男の妹。

確かに、この両家が結びついたなら、他の勢力はおいそれと太刀打ちできまい。

しかし、それは外部から一見したことであつて、互いに真逆の理念を追い求める一人の若き次期当主が、「妹の婚姻」という結びつきだけで上手くやってゆけるとはとても思えなかつた。

だがそれでも、当面の間は外見を繕うことはできる。

要は、直接対決の前に、互いの邪魔になる敵 古い因習にすがり既得権益を貪り国を疲弊させている勢力をすべて屠ることが先決だということなのだろう。

彼らが「邪魔」とみなした者達は、いかに才能ある若者とはいえるで立ち向かうには強大すぎる。

だからこそ、一時的な休戦協定の証。ユリウスは掌中の珠であるマリー・テレーゼを差し出すことでディートハルトに妥協を求めた。そして、その案をディートハルトが受け入れた。

そういうことなのだ。

口数少ないディートハルトの言葉からその真意を探り当てたマリー

テレーゼに、青年は満足そうに手を組めた。

「相変わらず、聰いな。あの偽善者にまんまと騙されアレの側につけたゆえ、その目はさぞかし曇つているだろうと思つていたが……。やはりそなたは、そなた自身の野心のためにアレについていたか。」

低く笑うテイートハルトを、マリー・テレーゼは睨み上げた。

「使い捨ての駒では不満か。……まあ、それはそうであらうな。それで、そなたの狙いは私の妻の座か？確かに、男爵家風情の人間が目指すには身の程をわきまえぬ高みではあるが。」

そのためユリウスに身を売ったか。

声にならない声がマリー・テレーゼを貶め侮蔑する。しかし彼女は怯まなかつた。

「わたしは、わたしが行けるところまで高みに昇つてみたいのです。そして、感じたい。『世界』が胎動する音を。その為には、手段は選びません。女が・・・・・カール様の言つ『男爵家』の人間がそこに辿り着くには、この方法しかなかつた。それだけです。」

どこまでも誇り高く、昂然と頭を上げてそう言い切る娘に、ディートハルトは整った長く細い指をそつと彼女の白い頬に滑らせた。

「…………高みを目指す人間は嫌いではない。だが、そなたがその為にアレに近づいたことが許せぬ。過ぎたことをこれ以上言っても詮無い、が。」

そこで一度言葉を切り、ディートハルトは暗紫の瞳に物騒な光を湛えてマリー・テレーゼを見据えた。

「そなたは、今でこそシュタイアーマルクの人間だが、婚姻が済めばそなたはエスター＝ライヒ公妃。婚姻以後、一切アレに近づくことは許さぬ。」

「…………それは！」

春風に散る薔薇の花びらが、芳香とともにフワリと一人の周りを舞い踊る中、まるで敵同士のように二人は睨み合つた。

誰が見ても一幅の絵画のように似合いの美しい一対だけに、殺伐とした空気を纏いながら艶やかな薔薇の中に立ち尽くす二人は、普通の恋人同士がそうであるように周囲の景色の中に甘く溶け込む、ということではなく、むしろ周囲が甘く幻想的であればあるほど二人の姿は違和感をもつて鮮明に浮き上がった。

「…………結婚し、婚家につくすのは妻として当然。ですが、

実家との縁まで切れとは、夫としてあまりに狭量なのでは？

挑発的なマリー・テレーゼの言葉を鼻で笑つテイートハルト。

「そなたが、なんのためにこの私の妻になるか、私が知らぬとでも？生憎、そんな女に敵と共謀する時間を与えるほど私は親切ではないのでな。」

「…………そこまで警戒しなくてはならない女と、よく結婚する氣になりますね。」

理解できない、といひように軽く頭を振るマリー・テレーゼをティートハルトは表現し難い奇妙な表情で見つめた。

それは、自身でも理解できない感情に困惑しているようでもあった。

「…………そなたは、今やリーフ・ロンシュタール社交界の華だ。そなた以上の華は当分現れるまい。そして、その知性と美貌は我がエスター・ライヒ家の妻にふさわしい。…………私は、そなたを『捨て駒』になどする気などなかつた。以前でさえ…………そしてこれからも…………。」

「…………え？」

最後の呴きのようないディートハルトの独白を聞きとがめたマリー・テレーゼだが、ディートハルトはその後固く口を閉ざし、それ以上何も語りうとはしなかつた。

ただ、「婚約を撤回するつもりはないから安心しろ。」とだけそつてなく言つと後は無言のまま鮮やかに咲き乱れる薔薇たちに誘われる様に茂みの中へと姿を消した。

そのディートハルトの理解し難い行動に困惑しながらも、一人で帰るわけにもゆかず、慌てて薔薇の中に消えた青年を追いかける侯爵令嬢。

二人の立ち去つた庭園には、中央に据えられた幼い天使が春の昼下がりの中無邪気に戯れる彫像の噴水から響く水飛沫の音だけが・・・

学園時代の硬い薔のような少女から、男を魅了せずにはいられない見事に咲き誇る華と変じた娘。

その美しい外見に気を取られたなら、即座に鋭い毒の一刺しで致命傷を負うかもしれない相手。

宿敵であるユリウスが放つた刺客だと解つても、なぜか突き放すことができない自分にディートハルトは戸惑つていた。

背を向けたものの別れ難い。

これまで感じたこともなかつた曖昧な感情に鉄の意思が揺らぐ不安。しかしそんな素振りを少しも見せず、ディートハルトはひたすら甘い芳香を放つ薔薇の中を歩く。

そんな男の背を小走りで必死に追いながら、これから先のことが思

い遣られ、覚悟を決めていたとはいえ突きつけられた現実にマリー・テレーゼは田の前が暗くなつてゆくを感じていた。

婚約者同士でありながら、一人の間には途方もなく深い溝がある。

それがディートハルトとマリー・テレーゼ、やがて夫婦になることが定められた二人の本当の始まりだった。

グラーツ学院時代に、マリー・テレーゼとユリウスがよく足を運び共に語り合つた薔薇園によく似た瀟洒な庭園を、美しく成長した娘は恋した男とは違う青年の背を追いかけ、薔薇の中を駆け抜けた。

マリー・テレーゼがシュタイアーマルク家の養女になってから、一年の歳月が流れた。

長いようで短い一年。

その間に、マリー・テレーゼはヨリウスの手の中で、どこか儂げな、夜露を宿した綻びかけの薔薇のような少女から、匂いたつような気品を纏つた深紅の薔薇のように艶やかな女性へと成長していた。

王宮を中心とする社交界で、もう彼女を「子爵家の庶子風情が・・・」と陰口を叩く者はいない。

マリー・テレーゼの優雅な美貌と気品ある所作には侯爵令嬢として恥じるところは一つもなく、むしろその非の打ち所のない貴婦人ぶりに、自然と男たちはその前に跪き、女たちは内心で歯噛みしながらも褒め称えた。

間もなくシュタイアーマルク侯爵の令嬢として、王位継承権をもつエスター・ライヒ公爵家の嫡子の正妃となる彼女に、正面から楯突ける度胸のある者など、権力の亡者が集う社交界には存在しなかつたのである。

かつてディートハルトが預言したように、マリー・テレーゼはリーフエンシュタール社交界の頂点に並ぶ者のない大輪の華として君臨したのだった。

そして、コリウスとディートハルトもまた。

無尽蔵であるかのような多彩な方面に恵まれた才能と限りある時間を無駄にすることなく、王立大学を軽々と飛び級し次いで卒業するのに数年はかかるはずの王立大学大学院を一年で突破した。

この秋、彼らは晴れて一人前の政治家として政界へと進出する。

言い換えれば、それはマリー・テレーゼとディートハルトの結婚が確実に近づいていることを意味した。

そして婚礼の日取りが正式に決まってからといつもの、以前からマリー・テレーゼに対し少々過保護な傾向があつたコリウスの態度が、田舎に誰の目にもあからさまになりつつあった。

しかし、そのようなコリウスの反応は、おそらく、さる公爵との婚姻を目前にして無残に殺された実の姉・ロベルティーネの悲劇が繰り返されることを怖れての行動であろうと、屋敷の誰もが窮屈を強いられるマリー・テレーゼに同情しながらも、行過ぎるコリウスの束縛に理解を示し彼を咎めようとはしなかつた。

そのせいで、マリー・テレーゼは買い物はあるか、一人で庭に出ることさえも禁じられた。

式の準備はすべて、シュタイアーマルク侯爵夫妻とコリウスが完璧に取り仕切っていたためマリー・テレーゼが口を挿む余地もなく。

ウエディングドレスや披露宴のドレスさえ、名のある仕立て屋を厳重に警備された屋敷にわざわざ呼びよせ、デザインの決定、採寸、布地の選択、一連の作業のすべては屋敷の中で済ませられた。

主役であるはずのマリー・テレーゼには、何一つ決定権はなく、彼女はただ人形のように従うしかなかつた。

シュタイアーマルク侯爵夫人は、娘の結婚式を取り仕切ることができることを無邪気に喜び、まるで自分の式のように、ドレスやアクセサリー果ては髪結いのデザイナーを選ぶのに夢中で、当の本人の顔色が優れないことに気づかない。

そんな娘をさすがに哀れに思つたのだろう、それまで沈黙を守つていた侯爵がユリウスに箴言した。

「お前は、テレサを結婚式の日までこの屋敷に監禁するつもりか？お前がロベルティーネの一の舞を怖れるのは判るが、あれではまるで、囚人のようではないか。」

父親の言葉に、ユリウスは柳眉を顰めた。

「囚人など、人聞きの悪い。・・・・・・父上は判つておられぬ。テレサとカールの結婚の重要性は、姉上の時の比ではない。この結婚で、政界の勢力図が大きく変わる。・・・・当然、そのことを面白く思わぬ者もいるでしょう。用心に越したことはありません。」

「だからといって、息抜きの散歩くらい許してやつたらどうなのだ？　このままでは、テレサは窒息しかねんぞ。籠の鳥でさえ、あそこ

まで不自由ではあるまい。」

「そのために、私が毎晩話し相手になつてているのです。卒業を間近に控えて学生として一番忙しいこの時期に、私がなんのために寮ではなく実家に帰つてきているとお思いか？」

そう。

ユリウスは毎夜、どんなに遅くなつても大学院から遠い郊外の本邸へと戻つてきていた。

それは、屋敷に閉じ込められ容易に人と会うことさえも禁じられたマリー・テレーゼを宥め、気鬱を晴らすための慰めに夜のひと時を彼女とともに過ごすため。

その為に、ユリウスは殺人的に詰め込まれたスケジュールをなんか遣り繰りし、まさに身を削つてその時間を作り出していた。

「お前が、テレサのために無理をしているのは知つてている。だが、そのやり方は、嫁入り前の娘相手には世間的に少々外聞がよくないのではないか？他にもっと上手い方法があるのだろう？・・・彼女の友人に来てもらうとか。」

父親の提案に、ユリウスは微かに唇を歪めた。

マリー・テレーゼに「友人」などいない。

少なくとも、こんな状況で心を開いて話せる友人などいはずだ。見せ掛けの「友人」は確かにいたかもしれないが、「友人」の顔をして平氣で彼女の足を引っ張つていた連中だ。信用できるはずもない。

自分の意見を受け付けそうもない息子の頑なな態度を見て、侯爵は書斎の肘掛け椅子に凭れながら溜息をついた。

忌憚なく表現するなら、ユリウスのマリー・テレーゼに対する態度は異常だ。

状況を考慮すると「無理もない」と思つ部分もあるが、ユリウスの行動はどう考えても行き過ぎである。「危険」というのであれば、養女であるマリー・テレーゼよりもむしろ正当な王位継承権を持つティートハルトを始末した方が、反対勢力にとつては都合が良いであろう。

だが、ユリウスはティートハルトの動向には一切興味を持たなかつた。

彼が固執しているのはマリー・テレーゼだけ。

その様子はまるで、愛する妹を守るというよりも、大切な玩具を奪われまいと他人の目から必死で宝物を隠す子供のよつな・・・。

そこまで考えて、侯爵はある可能性に気づき愕然とした。

だが、そもそもマリー・テレーゼを養女にしようと言つ出したのはユリウスだ。そんなはずはない。

むしろ、その方がどんなによかったか・・・・という本音を必死に振り払い、侯爵はユリウスとマリー・テレーゼ、彼にとつてはどちらもかけがえのない愛しい子供である「一人の行く末が、幸せなものであることを祈らずにはいられなかつた。

* * *

結婚が決まり、ヨリウスによつて屋敷に閉じ込められたマリー・テレーズは、夜を迎えるためだけに退屈と苦痛に満ちた長い一日を忍耐強く通り過ぎます日々を送っていた。

田の高いちは、翻い事や結婚式に備えてのしきたりの勉強。

より格式高い家へ嫁ぐための花嫁修業をみつちらと仕込まれ、その合間にお茶を共にしながら母親やサロンの貴婦人達のお喋りに付き合い、時にはドレスを取つ替え引つ替え着せられるマネキンの真似をさせられたりもした。

そして、ようやく空いた一人きりの時間は読書やピアノの演奏に没頭する。

そつやつて夜までの時を、彼女にとつてはあまり有益とは言えないことに浪費しながらひたすら闇の訪れを心待ちにする日々の繰り返し。

青い空がやがて黒い帳に覆われれば、唯一心安らかな時を過ぎますことのできる相手・・・・ヨリウスがやつてくるから。

二人きりになつたからといって、何をするわけでもない。

ただ、照明を落とした居心地の良い静かな部屋で、ヨリウスの良く

透る低い声が「外」のことを語るのを聞くのが好きだった。

そして、彼が請つままにピアノを弾いて聴かせるのも楽しかった。

厚いサテンのカーテンと固く閉ざされた扉。

二人きりの薄暗い密室で過ごす時間は、どこか背徳めいていて。

広い部屋の隅にひつそり置かれた幸せだった頃のいくつもの侯爵家のポートレイトが、結ばれてはならない一人が夜更けに共に居ることの罪悪感を刺激する。

だからこそ、その時間を共有することは一人にとって麻薬のようにやめられない日常と化した。

互いに、一歩間違えばそれが取り返しのつかない危険に繋がると解つても。

まるで、禁じられた恋人の秘め事のよう・・・。

まるで何かに魅入られたかのように秒刻みで姿を変える現実をよそに身動きのとれなくなつたマリー・テレーゼを、ある日、ディートハルトの「遣い」としてグラーツ時代の「友人」であるクリスティアナ・ルクセンブルクがシュタイアーマルク家を訪れた。

貴族階級ではないものの、今や世界有数の富豪となつたルクセンブルクの令嬢であるクリスティアナは、「貴族」への劣等感の裏返しの高慢さと負けん気がたまにキズだが基本的に育ちのよい素直さと甘さが愛嬌で、貴族の末端であるマリー・テレーゼとはほどど悪くはない関係であつた。

アンティーク好きで造詣も深いクリスティアナが思わず目を奪われるような、高価で格調高い家具が整然と配置されている上級貴族の客間に案内され、取り澄ました表情はしているもののそこに見覚えのある人影見つけると見目麗しい令嬢は緊張を解いたようにほつと無意識に息をついた。

久しぶりに会う友人の変わらぬ様子に、マリー・テレーゼは微笑んだ。

それが、自分を馬鹿にしたものではないことを理解しているクリスティアナは、怒るでもなく最新モードの胸元に飾りリボンが付いたドレスの皺を優雅に直すと、マリー・テレーゼの勧めるままゆつくりと大理石の卓を挟んでビロード生地に薔薇の刺繡が施されたソファに華奢な身を沈めた。

そして、運ばれてきた琥珀色の薰り高い紅茶に口をつけ人心地つくり、マホガニーの卓を挟んだ向こう側にいるマリー・テレーゼを見据え、おもむろに桜色の唇を開いた。

「まずは、お祝いを言つてあげるわ。婚約おめでとう。」

棘がない代わりに、随分と冷ややかで高飛車な言い様だが、無理からぬことだとマリー・テレーゼは思った。

なぜなら、クリスティイアーネはグラース時代からずっと、『ディートハルトを愛していたのだから。

「ありがと、クリス。」

他に何が言えただろう。

自分は、汚い手を使ってこの田の前の友人の想い人を手に入れたのだ。

・・・・正確には、「手に入れた」という表現は間違っているのだが、少なくとも表向きはそういうことになるのだろう。

だから、マリー・テレーゼは次にクリスティイアーネが自分を罵る言葉を吐いたとしても甘んじて受け入れる覚悟だった。

そのくらいされても仕方がないと思っていた。

自分と違い、少なくともクリスティイアーネは真剣に『ディートハルトに恋していたから。

しかし、予想に反してクリスティイアーネは冷静だった。

「貴女がカール様と婚約したと聞いたとき、正直貴女のことを憎んだわ。・・・ヨーリ様を利用してまでカール様に近づくなんて、あまりに卑怯だと思ったの。」

アクアマリンの瞳を真つ直ぐにマリーテレーゼに向け、クリスティーネは淡々と語る。

「でも、それはすぐに間違いだとわかったわ。それに、貴女はこの結婚で幸せにはなれない。だって、カール様は貴女を愛してはいいないし、貴女が愛しているのは昔から『やめてクリス！』

耐え切れず、マリーテレーゼはクリスティーネの言葉を遮った。何よりも辛いのは隠し通してきた真実。

偽りに慣れすぎたマリーテレーゼにとって、昔と変わりない真つ直ぐなクリスティーネの視線は予想以上に痛すぎた。

だが、クリスティーネは突きつけられた真実から顔を背けようとするマリーテレーゼの腕を強引に掴んだ。

「駄目よ！ここで逃げるなんて許さないわ！貴女は、私の夢を踏みにじったの。その罪をきちんと見てよ。そして、私に謝つて！」

「・・・・クリス・・・・

ソファから滑り落ちるように毛足の長いペルシア絨毯の上に崩れ座り込んだマリーテレーゼの傍らに膝をつきその細い両肩に手をかけると、クリスティーネは頃垂れる友人を力任せに揺さぶった。

「謝つて！謝りなさいよ！…愛してもいなくせに、私からカール様を奪つたことを。の方を愛してもいない貴女が、どうやってこれからの方を幸せにして差し上げるところの？」

悲痛な叫びが、客間の静謐な空気を切り裂いた。

「・・・クリス・・・・。」

いつしか、クリスティアーネのアクアマリンの瞳からは大粒の涙が零れ落ちていた。いつもは綺麗に整えられている豪奢な金髪も、強風に煽られたかのように乱れている。

その涙に触発されたように、マリー・テレーゼのアレキサンドライトの瞳からも透明な涙がポツリと落ちた。

「・・・でも一番許せないのは、貴女がユーリ様を愛していながらカール様と結ばれるところじよ。」

先程までの激昂が嘘のように、静かな声がマリー・テレーゼの頭上から降り注いだ。

顔を上げると、そこには深い哀しみと慈愛を湛えた聖母のような表情があった。

「クリス・・・・わたしは・・・・。」

「ユーリ様を愛していない、と言つつもり？そんなの嘘よ。貴女の

嘘は男を騙せても、女の私は騙せなくってよ。」

「クリス・・・・」めん・・・なせい・・・。

再び俯いたマリー・テレーゼの瞳から、ポツリポツリと水晶のような涙が自身の手に落ちては弾けた。

その涙を拭うように、クリスティアーネは手入れの行き届いた細い指でマリー・テレーゼの纖細な手を撫ぜた。

「私だつて、判つていたわ。どんなに好きでも、所詮、平民の私は公爵家のカール様の正妻にはなれないってことくらい。よくて愛人よ。・・・でもそんなものには最初からなるつもりはなかつたわ。だから、いつかは終わる恋だつたの。」

大きな瞳を悲しげに揺らしてクリスティアーネは続ける。

「でも、それでも、初めて本気で好きになつた人だから。・・・どうしても幸せになつてほしいの。それくらい願つても罰はあたらぬいでしょ? それなのに、カール様の相手がよりによつて貴女だなんて。初めてこの話を聞いた時は悪い冗談かと思つたわ。」

「そうね・・・。わたしも、初めてこの話を聞かされた時は、ありえない絵空事だと思つたわ。」

「貴女はヨーリ様に、利用されているのよ。貴女の心を利用されているのよ? 本当にそれでいいの? 貴女は、それで幸せなの? テレサ。」

「ディートハルトだけでなく、自分のことまで気にかけるようなクリ

ステイアーネの言葉に、マリーテレーゼは不思議そうに瞳を瞬かせた。

「何故、わたしを……？憎んでいるのではないの？」

「ああ！もう、これだから貴女つて……！」

苛立たしげに、クリスティアーネは立ち上がった。そして、昔よくそうしたように、居丈高に顎を上げツンと横を向く仕草をした。何故か今となつては、その様子すらとても愛らしいと思えるのは、マリーテレーゼがクリスティアーネという人の「本当」を知つたからなのだろう。

高慢さと虚勢に隠れがちな美德、少女特有の率直さと一途さと勇気を。

「べつに、貴女の心配をしているわけではなくつてよ。むしろ、私は貴女のことが大嫌いだわ。ただ、貴女が不幸なままだと、一緒にいるカール様まで不幸になつてしまふから……。だから、これはあくまで、カール様のためよ。貴女は、私や他の女を差し置いてあの方の妻になるのだから、幸せにならなくてはならないの！」

ところどころ矛盾はあるものの、どうやらクリスティアーネは自分を心配してくれているらしい。

学生時代は、胸襟を開ける間柄ではけしてなかつた。むしろライバルといった側面の方が強かつたクリスティアーネであるが、同じ生徒会補佐の女友達の中では一番気の合う友人でもあつたことを、マリーテレーゼは思い出した。

他人を信用せず、自ら孤立した立場を保ち続けた己の愚かさを今に

なつて彼女は悔やむ。

自分がもつと素直に歩み寄ることができれば、学園生活はもつと充実したものになつたかもしれないのに。

だが、それは今からでも遅くはないのかかもしれない。

こんな意固地な自分に自ら歩み寄つてくれたクリスティアーネの不器用な心遣いが嬉しくて、マリーテレーゼは思わず微笑んだ。

「ありがとう、クリス。」

「・・・なによ。嫌を言われてお礼なんて・・・変な人ね。」

泣いて喚いてすつきりしたのか、クリスティアーネは鏡の前で軽く化粧を直すと、来たときと変わらぬ大財閥の令嬢にふさわしい華やかな出で立ちで、こちらもまた素早く自分を取り戻したマリーテレーゼの前に立つた。

そして、部屋を出る前にひつそりと友人に告げる。

「あのね、私がこの屋敷に入ることが出来たのは、カール様のお陰なの。ああ、そのまま黙つて聞いて。・・・カール様は今の貴女の状況をひどく気にしていらしたわ。ヨーリ様の貴女に対する執着は異常だもの。カール様は貴女のことがお好きよ。・・・学園時代の頃からずっと、ね。だからきっと、カール様の方が貴女を幸せにできるわ。」

悪戯っぽく囁かれた言葉に目を見張るマリー・テレーゼに、クリステイアーネは笑った。

「ねえ、私、昔よりずっといい女になったと思わなくて？見ていらして。私はいい男を捕まえて絶対に幸せになつてみせるわ。だから貴女も・・・幸せになつて。カール様なら大丈夫よ！」

そう言つて去り際に手を振る友人の颯爽と歩む後ろ姿を見送りながら、マリー・テレーゼは改めて同性の友人のありがたみを感じずにはいられなかつた。

「ねえ、クリス。わたしたち、これからもお友達よね。」

「あら、当たり前でしょ。エスター・ライヒ公爵夫人になつた貴女には私の未来の旦那様を紹介してもらつ予定なのだから。せいぜい、貴女の腕と審美眼に期待していくよ。」

顔を見合させて笑い出す二人。

夏の日差しが邸内を照らす、ほんのひと時。

彼女たちはグラースにいた頃の、無邪気な少女に戻つていた。

* * * *

そしてまた夜が来る。

ユリウスの訪れを待つだけの、孤独な夜が。

マリーテレーゼはいつもの部屋で、気の向くままにピアノを弾いていた。

彼女とユリウスの部屋の丁度真ん中にある続き部屋は、居心地の良い空間を勤めて造り出そうと、落ち着いた雰囲気に仕上がっていた。さほど広くない室内には白いグランドピアノやシンプルなソファや小卓があり、壁にはたくさんの絵画が飾られマントルピースの上には小さなポートレートや写真が置かれている。

その中の一つ、ショタイアーマルク家のポートレートに目を留めたマリーテレーゼは鍵盤を叩く指を止め、そっとセピア色の写真を手に取った。

銀細工の小さなフォトフレームに納まつた、侯爵夫妻と幼い一人の子供。

おそらく、仲良く手を繋いだ二人はユリウスとロベルティーネなのだろう。

4人並んだ姿はとても幸せそうで、他人の入る隙のないほど完璧に調和して見えた。

実姉、ロベルティーネの死をきっかけに、ユリウスは変わつていつたのだといふ。

「目的の為なら、手段を選ぶ必要はないって。不当な暴力のない理想郷を実現する為には何をしても許されるんだって。他ならぬ神がそれを許したって、言つたんだ。・・・あいつ・・・。」

寂しげにそう語つたのは、もうリーフォンシュタールにはいないユリウスの幼い頃からの親友でありマリー・テレー・ゼ異母兄にあたるフィナルトだ。

それまでの、「すべての国民が等しく幸せになれるような」という美しいだけの青い理想が覆るほどに、ロベルティーネの「死」はユリウスに衝撃をもたらしたのだろう。

何度か訪れた、小高い丘の上にあるロベルティーネの墓には、常に新しい花が供えられていることからも彼女が多くの人から愛されていたことが判る。

ユリウスはまだ来ない。

薄暗い静寂のなかでマリー・テレー・ゼは一人、家族の写真を眺めつづ

けた。

そこに、自分の入る余地などない。

どんなに自分がロベルティーネに似ていても。
どんなに侯爵夫妻に可愛がられようとも。ゴリウスに優しくされようとも。

所詮、代用品は代用品。

必要がなくなつたら、すぐに捨てられるのだろう。

そんな想いが、孤独な少女の胸中をよぎり、キリキリと心を締め上げた。

白い指でそつと眞の中で無邪気に微笑む幼いロベルティーネの整つた顔をなぞる。

「貴女は、死んでもなお、皆に必要とされているのね。

・・貴女が、羨ましいわ。」

感情のない瞳で小さく漏らすと、やにわに彼女は手にしたフレームを床に叩きつけた。

ガシャ・ン

さほじ大きな音をたてる」となく、床に落ちたフォトフレームは表面を上にして転がる。

それでも、罅割れたガラスの内で変わらず幸せそうに微笑む家族達。込み上げるやるせなれど參めたい、マリー・テレーゼは思わず顔を背けた。

「・・・わたしも、貴女のように愛されたかった・・・。」

マリー・テレーゼの心を代弁するかのよう、乱暴に両の手をついた鍵盤から悲しげな不協和音が鳴り響いた。

夜は更け、月は西へと傾いてゆく。

その夜、彼女の待ち人はついにその部屋を訪れるることはなかつた。

夜の帳が下りたら 2（後書き）

カールハインツ・ディートハルトなので愛称は「カール」だが、カールハインツという名称は日本でいうところの太郎花子みたいなものなので区別するために一般的にはエスター・ライヒ家のディートハルトと呼ばれています。

ディートハルトとマリー・テレーゼの婚礼は、王都・ツェルナーの中にある大聖堂で執り行われた。

時には国をあげての祝典ミサや王族の婚礼が行われることもあるこの大伽藍は、国威の象徴だけあって、その内部装飾の絢爛豪華さは、王宮にある礼拝堂の比ではない。

そういう場所で式を挙げられる者は、「ごく限られた「特別」な者だけである。

シュタイアーマルク家もエスター＝ライヒ家も、そして式に招かれた誰もがその意味の重大さを噛みしめていた。

リーフェンシュタール聖教の總本山であるこの聖堂は、大教主の「許可」がなくてはどんな高位の貴族も容易に立ち入ることはできない。

当初、そのような大掛かりな場所で式を挙げるつもりなどなかつたディートハルトやヨリウスであるが、国王にこの婚姻が知られるに至つて状況が一変した。

以前から、この国の未来を担うであろう突出して優秀な若者一人が実はお世辞にも仲が良いとはいえない関係であることを、親友でありグラーソ学院の理事長であるシラー公爵から聞き及び密かに心を

痛めていた国王が、ユリウスの義妹と国王の甥にあたるティートハルトが婚姻することで二人が義兄弟になることを非常に喜び、自分も何か力添えしたいとこの由緒ある大聖堂で式を挙げることをよかれと思って命じたのである。

そのことで、この有力貴族同士の婚姻は国民全体に知れ渡ることになつた。

それは、私的なことをあまり大袈裟にしたくないディートハルトにとつては迷惑以外の何者でもなく、そもそもしかるべき時が来たら二人を破局させようと田論んでいたユリウスにとつては予想外の痛手だつた。

何も知らない一般国民にとつては、男爵令嬢から一気に王位継承権を持つ青年の公妃となるマリー・テレーゼはまるで現代版シンデレラであり、特に夢見る少女たちの憧れの対象として語られた。

そして幾許かの事情を知る貴族たちは、この婚姻で有力貴族・シュタイアーマルク家との対立を回避した。いずれは一人娘が王妃になることが決定している。エスター・ライヒ家の天下がゆるぎないものになつたと溜息をついた。

そんな風に様々な人々の思惑が絡み縛れ合つのを横目に、一人はついに婚礼の日を迎える。

秋の深まる10月の下旬。

紅い夕日が翳る、黄昏時のことであった。

「まあ！なんて綺麗なの。きっと、この大聖堂で式を挙げた歴代の花嫁の中でも、こんなに綺麗な花嫁はいなかつたでしょう。ええ、絶対そうに違いないわ。」

花嫁の控え室。

純白のウェディングドレスを身に纏い、引き摺るほどに長い、ウェーブを被り百合を基調とした可憐なブーケを手にしたマリー・テレーズは、早くも感動のあまり涙ぐんでいる義母の言葉に僅かに苦笑した。

「それは、いくら何でも言ひ過ぎですわ、お母様。」

「そんなことはないわー！」の貴女の姿を見たらあの堅物のティート・ハルト様だつて誇らしく思つに違ひなくつてよ。貴女は、もつと自信を持つべきだわ。」

控えめに謙遜したマリー・テレーズの言葉は、やや興奮気味な侯爵夫人によつて即座に否定された。

確かに、侯爵夫人が自慢するのも無理からぬほど、マリー・テレーズは美しかつた。

そんな彼女が着ている、侯爵夫人が家の名譽をかけて手配したウェ

「ディングドレスは素晴らしいの一言で済む。」

デザインそのものは、格式を重んじ露出の少ないオーソドックスなものだったが、ドレスの裾や襟、袖に惜しみなく散りばめられたダイアや真珠は、室内の照明を受けてキラキラと輝き、白いシルク生地の上に重ねるように縫いとめられた手織りのマクラメレースが、白の清楚に加えて気品ある華麗さを演出している。

そして、長いヴェールはすべて最高級のカラチャリレースで。

その豪華さは、おそらく小さな家一件分は軽く買えるだろうと容易に予想がつくほど絢爛なものだった。

目の眩むような見事なウェディングドレス。

マリー・テレーゼのためだけに用意された、婚礼の品、嫁入り道具すべてに、侯爵夫人そしてシュタイアーマルク侯爵の彼女への愛情を感じられた。

何よりもマリー・テレーゼが嬉しく思つたのは、ドレスに施された刺繡の模様が、二頭の獅子と百合を合わせた、シュタイアーマルク家の家紋をモチーフにしていたことである。

それは、短い時間であつたが、少なくとも侯爵夫妻は自分をシュタイアーマルクの人間として受け入れてくれたことの証のように思えたのだ。

例えそれが、「き口ベルティーネの代わりとして受けている愛情だつたとしても。

マリー・テレーゼにとっては、涙ができるほど嬉しいことだった。

「お母様…………。本当に、ありがとうございました。」

万感の想いを込めて、マリー・テレーゼはハンカチを目頭にあてている夫人に頭を下げた。

それを見て、夫人の涙は止まるどころか一層激しくなるばかりだった。

「わたくしは、貴女を実の娘だと思っているわ。…………だから、たとえ嫁いでも貴女はシュタイアーマルクの娘。辛くなつたらいつでも帰つていらつしゃい……。」

震える声でそう言つたと、後は言葉にならないといつよつに夫人は嗚咽した。

シルバーグレイの正装姿でユリウスが控え室に入ってきたのは、そんな時である。

「母上。式が始まる前からそんなに泣いては、テレサが困るでしょう。それに、折角の美しい装いが台無しですよ。……父上がお呼びです。外で、少し心を落ち着けられるといい。」

花嫁の前で、子供のように泣きじやぐる母親に少し呆れたようにコリウスはそう言つと、軽く夫人の腕を取り扉の方へ押しやつた。

「…………。そうね。わたくしつたら…………。これからが本番だといつのに。コリウス、後は頼みます。式の前の花嫁というのはとかく神経質になりやすいものよ。だから、一人きりにさせては駄目。」

式が始まるまで・・・・・傍にいてあげて。」

「ええ。そうします。」

何も知らない夫人の気遣いは、むしろマリー・テレーゼにとっては余計神経質になるような歓迎すべからざる状況を生み出すだけだったが、まさか断るわけにもゆかず、去つてゆく夫人に仕方なく軽く会釈をした。

慌しく夫人が控え室を出てゆくと、あとは莊厳な空間に一人きり。

沈黙が、二人の間の緊張を嫌でも高めてゆく。

最初に口を開いたのは、鏡台の前に座った花嫁姿のマリー・テレーゼをしばしみつめていたゴリウスだった。

「とうとう、この日が来てしまったな。」

まるでこの婚姻が実現しなければよかつた、とでもいいつつも重い口調を皮肉に感じながら、マリー・テレーゼは頷いた。

「ええ。貴方の望みのままに・・・。これで、ゴーリ様ともお別れですね。」

「別れ? 何故そんなことを・・・・・。君は、カールの妻になつてもシユタイアーマルク家人間だ。この婚礼があろうとなからうと、

私たちの関係は何も変わらない。」

どこか悲壮感さえ漂うその声に、マリー・テレー・ゼはヴェール越しに仮初めの義兄を見上げた。

久し振りに会うユリウスは、少しだけやつれて見えた。だが、陰のさした美貌はより彼の完璧さを引き立てるだけで、むしろ人間味が加味された分、それまでなかつた人心を惑わすような仄かな色香が、彼をさらに艶めいて見せていくようだった。

今頃、この人は何を言つてゐるのだろう。

一人きりで夜が明けるまで彼の訪れを待つた日。
寄る辺のない己の立場を嫌でも再確認させられたあの夜。

あの日以来、一人の密やかな真夜中の逢瀬が繰り返されることは一度となかった。

だからマリー・テレー・ゼは、自分はついにユリウスにも見捨てられたのだと思つた。

解つていた筈。結局、他人から『えられる幸せなど、泡沫のようなものだということくらい。それなのに、理性の声を聞かずにユリウスに依存してしまった自分の弱さをマリー・テレー・ゼは呪つた。

誰にも心を許さず、信じず。

他人に何かを期待してはならない。そうして自分は、自分で掴み取

つた幸せだけを信じよう。

血の涙を流す心を封じ、実の両親に見捨てられた孤独な娘は、そう決意したばかりだというのに。

「わたしは、自分のためにカール様の妻になるのです。ユーリ様は御自分の理想を確実にする手段として、わたしをカール様と結婚させたかった。わたしは、より高みに行くために、ユーリ様の提案にのつた。」

ヴェールが自分の顔を目の前の完璧な貴公子から隠してくれていることを感謝しながら、マリー・テレーゼは淡々と続けた。

「お互いに利害が一致し、上手く利用し合えたのです。自分の目的達成のための「手段」。それが、わたし達の関係のはず。それ以下でも、以上でもありません。」

硬く冷たい声が、室内に響く。

誰もが憧れる国一番の大聖堂でこれから式を挙げようとする幸せな花嫁の声にはとても聴こえない、と自嘲しながらマリー・テレーゼは心無い言葉を紡ぎ続けた。

「カール様は、貴方と接触することを許さないでしょう。わたしは、カール様の望む妻になるつもりです。・・・だから、ユーリ様とはこうして二入りで時を過ごすことは一度とありません。」

「・・・それが、君の答えか？・・・本当に、心からそう思つてゐるのか？君は私を愛してくれていると思ったのは、私の勘違いだつたというのか？」

何もかも見透かすようなコリウスのサファイアの瞳が、マリー・テレーズに突き刺さる。

しかし彼女は怯まない。

震える心を隠し、マリー・テレーズはきつぱりと言つ切つた。

「愛していません。何故、今更そんなことを？意味のないことですね。」

「もう一度、言つてくれないか。ヴェールを上げて、私の目を見てもう一度。」

白い手袋に包まれた手が、マリー・テレーズの顔を覆つ纖細なレースに伸びる。しかしその手が彼女に触れるることはなかつた。

「いけません！」このヴェールは、祭壇の前で夫と誓いの口付けを交わす時に初めて夫が触れてよいもの。・・・・コリー様に、その権利はありません。」

最後通牒のようなマリー・テレーズの言葉に、コリウスの手は空で力を失いそのままダラリと落ちた。

気まずい沈黙の中、二人は再び睨み合つ。

「それでは、今日を境に君は私の敵になると？」

「裏切りだと思われますか？貴方を利用した卑怯な女だと。」

「…………いや。」

しばしの逡巡したもののマリー・テレーゼ問い合わせを最終的にきっぱり否定したユリウスは、先程までの憔悴ぶりが嘘のようにその瞳に得体の知れぬ不吉な輝きを宿していた。

「いいや。裏切られたとは思わない。……君に逢わなかつた数日間、ずっと考えていた。……悪いのは私だ。自分の心を偽つて、理想のために君を人身御供に差し出そうとした私の。本当はずつと昔から、君に惹かれていたというのに。」

初めて聞く、ユリウスの本音。

だが、それはあまりにも遅すぎた自覚だった。

マリー・テレーゼがユリウスに応える前に、式の開始を告げる使者が控え室の扉を叩く。

「…………参ります。」

重いドレスが汚れぬよう長い裾を持ち上げ、清楚でこの上なく美しい花嫁は優雅に立ち上がる。

そんな彼女を、じく自然な動作でエスコートしながら、控え室の扉が開く直前、コリウスはマリー・テレーゼにだけ聞こえるよう、彼女の耳元で囁いた。

「君が、どう思おうと構わない。だが、これだけは覚えておくといい。私は必ず君を取り戻す。君が高みへ行きたいというのなら、私がそこへ連れて行つてやろう。だが、今は・・・・・・」

扉が開いた瞬間、コリウスの手が離れた。

マリー・テレーゼは振り向くことなく、祭壇の間へと歩み出す。

天使に喰えられる清冽な美貌の青年が呪うように吐いた最後の言葉など聞かなかつたかのようだ。
躊躇うことなく前だけを見据えて・・・・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1516ba/>

幻想の白い花～或る貴婦人の肖像～

2012年1月14日20時48分発行